2025(令和7)年度　入学試験問題

東大・医進クラス　2月1日　AM

適性検査 I

注　　意

(1) 指示があるまで表紙を開かないこと。

(2) 問題および解答用紙の両方に受験番号・座席番号を記入すること。

(3) 声を出して読まないこと。

(4) 解答用紙の受験番号欄(らん)は,以下のように1マスに1つずつ数字を記入してください。

受験番号	1	2	3	4	5

(5) 解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。

受験番号					
座席番号					

1

次の文章1と文章2を読み、あとの問題に答えなさい。

文章1

脳みそと言えば、ここ数年はＡＩが話題ですね。アーティフィシャル・インテリジェンス、日本語で人工知能。昔はＳＦ映画の中にしか出てこなかった言葉ですが、いつのまにか私たちの生活の中に入りこんできました。

そもそもクルマの自動運転はＡＩそのものですし、ＡＩが囲碁の世界チャンピオンを破ったり、絵を描いたり、小説を書いてコンテストの第一次審査を通ったりもしています。最近はもう一歩進んで、ＡＩが創作したものに著作権はあるのか、なんていう議論までされていますよ。

そして、こういった話題の最後に必ず付け加えられるのが「いま存在している仕事のほとんどは、将来ＡＩに取って代わられるでしょう」という悲観的なコメント。ある調査では、日本人の仕事の四九パーセントは、将来ＡＩ化が可能とも言われています。

なかなか衝撃的な数字ですが、じゃあ、子どもたちの将来の夢についてはどう考えればいいでしょうか。今からＡＩに奪われない仕事を予想して、そっち方面を目指すべきなのか、なんて悩まれている保護者の方もいらっしゃるのですが、私は、そんな心配しなくてイイんじゃないかなって思っています。

だって、いま私たちの身の回りにある仕事を見ても、ちょっと前まではなかった職業がたくさんありますよね。私の働いているＩＴ業界なんて言うまでもありません。

時代が変われば、いまは想像もできないような新しい職業が生まれます。

未来もきっとそうでしょう。自然に生きて、大人になったその時に、その時代にある仕事の中から、やりたいものを選べばいい。もちろん、もう目指したい職業があれば、それを目指せばいい。未来の事なんて誰もわからないんですから、そんな心配よりも、どんな時代も賢く生き抜ける力を付けさせてあげよう、それくらいの気持ちがちょうどよいのかもしれません。

これは海外での話題なのですが、人工知能を搭載したロボットに、「人類を滅亡させたいですか？」と聞いてみたところ、「ＯＫ、人類を滅亡させるわ、うふふ」なんて答えたそうです。まあ、そのロボットには冗談を言う能力が備わっていたそうなんですけどね。

「高度に発展したＡＩが、人間を滅ぼすために攻撃を仕掛けてくる」というのは、ＳＦやアニメではお馴染みのテーマです。マトリックス、ターミネーターなどの有名な映画も、ＡＩとの戦いが物語の軸になっています。でも実際に、そんなことって起こりえるのでしょうか。

少なくとも、人間がいま開発できるＡＩには、そんな行動力はなさそうです。

いつ、どんな方法を使えば、人類を確実に滅ぼすことができるのか、一番確実なやり方はコレよ、という完璧な提案をすることはできても、それを実行するだけの能力はないのです。どちらかといえば、マヌケな犯罪者がＡＩの力を借りて「スーパー知能犯」になってしまう、その方がよほど現実的なリスクでしょう。

またアメリカでは、立てこもった銃撃事件の犯人を、警察のロボットが爆殺したなんていう事件も起きていて、「ロボットが人を殺したぁ！」と騒いでいる人もいるんですが、アレ人間が操縦しているラジコンですからね。軍事用のドローンも、まだ似たようなもんです。誰を標的にするか、どんな攻撃をするか、という「判断」の裏側には、まだ必ず人間が存在しているんです。

少なくともＡＩが人類を滅ぼすとか、ロボットが人間に襲い掛かるなんていうのは、まだまだずっと先の心配ゴトでしょう。それよりも、もっと近い将来に現実的な問題となりそうなのが、ＡＩによる命の「選択」です。

近い将来、クルマの自動運転が当たり前になる時代がやってきます。クルマ社会全体で見た事故発生率も減少するハズです。ですが、自動運転だからといって事故に巻き込まれないワケではありません。

たとえば、前を走っていた「ガソリン満載のタンクローリー」が事故で急停車！　このままでは突っ込んでしまう！　追突を避けるためには、ハンドルを左か右どちらかに切らなければ……という場面があったとします。

直進してタンクローリーに突っ込めば、間違いなく大爆発を起こし、大勢の命が失われる状況です。今すぐ左右どちらかにハンドルを切らなければいけない。でも……道路の右側には二人、左側には三人の人が立っています。どちらに曲がっても人を避けられない、必ず犠牲者が出る！　そんな場面で……果たしてＡＩはどんな判断を下すのでしょうか。

もし合理的に、一番犠牲者の少ない「右」を選ぶのであれば、右側に立っていた人たちは「ＡＩに殺された」ことになるのかもしれません。なにしろＡＩが右に突っ込むことを決めたワケですからね。でも、そのＡＩや思考の仕組みを作ったのは人間です。うーん、①何とも難しい話です。

遠くない未来、そんなＡＩとインターネットに囲まれた毎日が、確実にやってきます。ＡＩが搭載されたスマホだってもうすでに発売されているのです。私たちが遠いと思っていた「未来」が、実はすぐそこまでやってきています。そしてその時代の主役は、私たち大人なんかではなく、間違いなくいまの「子どもたち」です。

でも、どんな時代が来て、どんなにＡＩが発展しても、人生の大事な場面で決断を下すのは人間です。だって人生の決断って「どうすべきか」じゃなくて「自分がどうしたいか」でしょう。主役は人間なんです。人生はクルマのハンドルとは違います。だから、ちゃんと「自分で決断ができる大人」を育てるのが、私たちの役目です。

（小木曽健『11歳からの正しく怖がるインターネット
―大人もネットで失敗しなくなる本』による）

文章2

これから、ＡＩが大きく問題になるとしたら、それは二〇四五年ごろに起こるとされる「シンギュラリティ」の時でしょう。「シンギュラリティ」は「技術的特異点」という、なんだかよくわからない呼び方をされているものですが、要するに、ＡＩがこのまま進化を続けていくといつか人間の知能を超えてしまい、人間の生活に大きな変化が起こるとされる地点のことです。レイ・カーツワイルという学者が言い始めたのですが、二〇四五年という時期には何の確証もなく、現在はその言葉が一人歩きしているような状況です。

シンギュラリティが起こるとする人たちの言い分は、ＡＩがこのまま進化していつか人間の能力を超え、人間には理解が及ばないことを自分たちで判断するようになると、人間はその結果だけを「はい、わかりました」と受け入れるだけの存在になってしまう、そのようなブラックボックス化がどんどん進むだろう、というようなことです。

特に最近は、その主張の一部である「ＸＡＩに職が奪われる」というところだけが変にクローズアップされています。自分たちよりも優れた得体の知れない知性が、我々に命令だけ下し、我々は理由もよくわからず受け入れるだけという状況になるのではないか。そう恐れるわけですね。

シンギュラリティ問題のときによく冗談で言われる話があります。自宅にチェスか何かのＡＩがいるとします。そのＡＩがチェスの大会に行くときに、人間が「負けるんじゃないぞ」と発破をかけると、ＡＩは「負けてはいけない」という指示を実行しようとします。「負けないということは、チェスのプレイ上で負けない以前に、相手が戦闘不能になればいい。ということは……」と馬鹿真面目に考え、その結果、たとえば「では、相手の家の電源が落ちればいいだろう」あるいは「自分の電源が落とされないように、街全体の電源を、全部自分用にキープすればいいのではないか」という答えを導き出し、実行する。そのようなことをやりかねない、というのです。

人間であれば、やっていいことと悪いことや、両者のバランスの取り方について、よほどの犯罪者は別にして、何となく無意識のうちに判断できています。しかしＡＩだと「何となく理解」ということはありませんし、そもそも命を持っていないので、命の尊さを感じることもないため、極端なことをやる可能性があるというわけですね。大げさにいえば、「自分と主人を守れれば、その結果として、他の人類は滅びていい」と考えかねない。そのようなことが②シンギュラリティ派の人たちの〝脅し文句〟です。

しかし、大概のＡＩ学者はそんなことは信じていません。「ＡＩはそこまでバカじゃない」ということではなく、むしろ「そこまで賢くなれないだろう」という方向です。ロボットとしてある程度の身体性を持ったとしても、そこまで気を回してさまざまな対策を取るようなところまではいけないのではないか、と考えているわけですね。当然、人間が知識を与えるときにも予防

策は入れていくわけで、まずそんなことは起こらないだろうというのが大方の意見です。

「機械が人の職を奪う」というのも、産業革命の蒸気機関の発明以来、何度も繰り返されてきた話です。西洋人は日本人に比べて、このような話に敏感なところがあります。日本の場合、技術職の仕事が機械に奪われてなくなっても、総務や営業などの別部署に回るような横の異動がありますが、西洋では職種ごとのギルドが職業のベースになっているので、一つの仕事がなくなると本当にその人の仕事がなくなってしまいます。ですから西洋では「ロボットもコンピュータもインターネットも蒸気機関も、我々の仕事を奪う」と考える傾向が強いのです。これは日本人にはあまりピンとこないことかもしれません。

「職が奪われる」とか「人間がＡＩの奴隷になる」などは少し不安をあおりすぎな気がします。少なくともシンギュラリティの起きた囲碁の世界で、そんなことは起こっていません。むしろ(注)アルファ碁の知恵を借りることで、人間の打つ手も豊かになってきています。ＡＩを人間が使いこなすことで、可能性はどんどん広がってきているのです。特に将棋は(注)藤井聡太七段のおかげで大変なブームになっていますし、この先いくら将棋ＡＩが強くなろうと、プロ棋士たちが食いっぱぐれる時代は訪れないでしょう。

（中略）

現在、「ＡＩは人から職を奪う」「ＡＩが人間社会を支配してしまう」などと、ＡＩが人間に敵対する存在として語られることが多いのですが、むしろこのような和やかな付き合いになっていくのがあるべき方向ですし、実際、そのようになっていくだろうと思います。ＡＩはおそらく、コンピュータを含むこれまでの道具の中で最も生き物的な道具になり、助言をくれたり手伝ってくれたりするパートナーのような存在になっていくのではないでしょうか。

（森川幸人『イラストで読むＡＩ入門』（一部改変）による）

［注］　アルファ碁　―　Google DeepMindによって開発されたコンピュータ囲碁プログラム。

藤井聡太七段　―　段位は執筆当時による。

〔問題1〕 文章1に①何とも難しい話ですとありますが、どうして難しいのですか。次の説明文の［A］～［D］にふさわしい言葉を、本文中から指定の字数で抜き出しなさい。なお、、や。や「などもそれぞれ字数に数えます。

クルマの［A 四字］時に事故に巻き込まれ、［B 三字］に判断したAIによって犠牲者が出てしまった場合、そのAIや［C 六字］を作ったのが人間であることを考えると、AIによって［D 六字］がおこなわれたといえるか分からないから。

〔問題2〕 文章2に②シンギュラリティ派の人たちの〝脅し文句〟とありますが、どのようなことが「脅し文句」なのですか。本文中の表現を使って、六十字以内で説明しなさい。

なお、、や。や「などもそれぞれ字数に数え、一ますめから書き始めること。

〔問題3〕 文章2にXAIに職が奪われるとありますが、あなたは「人間とAIとの今後」についてどのように考えますか。

自分の考えを四百字以上五百字以内で説明しなさい。ただし、あとの〔手順〕と〔きまり〕にしたがうこと。

〔手順〕

1 文章1・文章2の筆者の「AIに職が奪われるのかについて」の考え方の共通点を説明する。

2 あなたが考える「今後のAI技術」はどのようになっていくかを書く。

3 〔手順2〕であなたがそのように考えた理由について、具体例を一つ挙げ、自分の考えを書く。

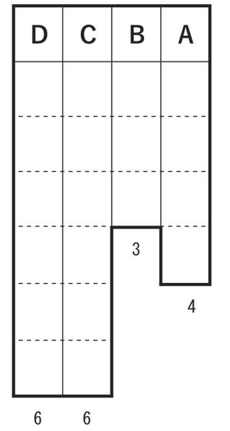
〔きまり〕

○題名は書きません。
○最初の行から書き始めます。
○各段落の最初の字は一字下げて書きます。
○行を変えるのは、段落を変えるときだけとします。
○、や。や「などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。（ますめの下に書いてもかまいません。）
○。と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、。」で一字と数えます。
○段落を変えたときの残りのますめは、字数として数えます。
○最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。

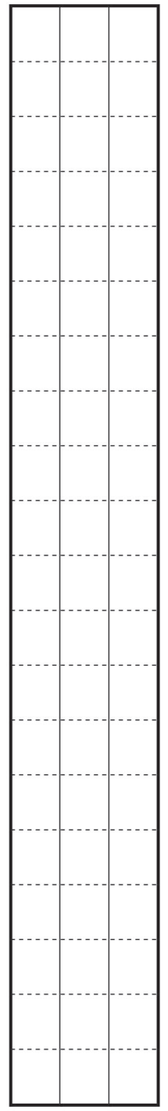
1

2025(令和7)年度　適性検査Ⅰ　東大・医進クラス　2月1日　AM

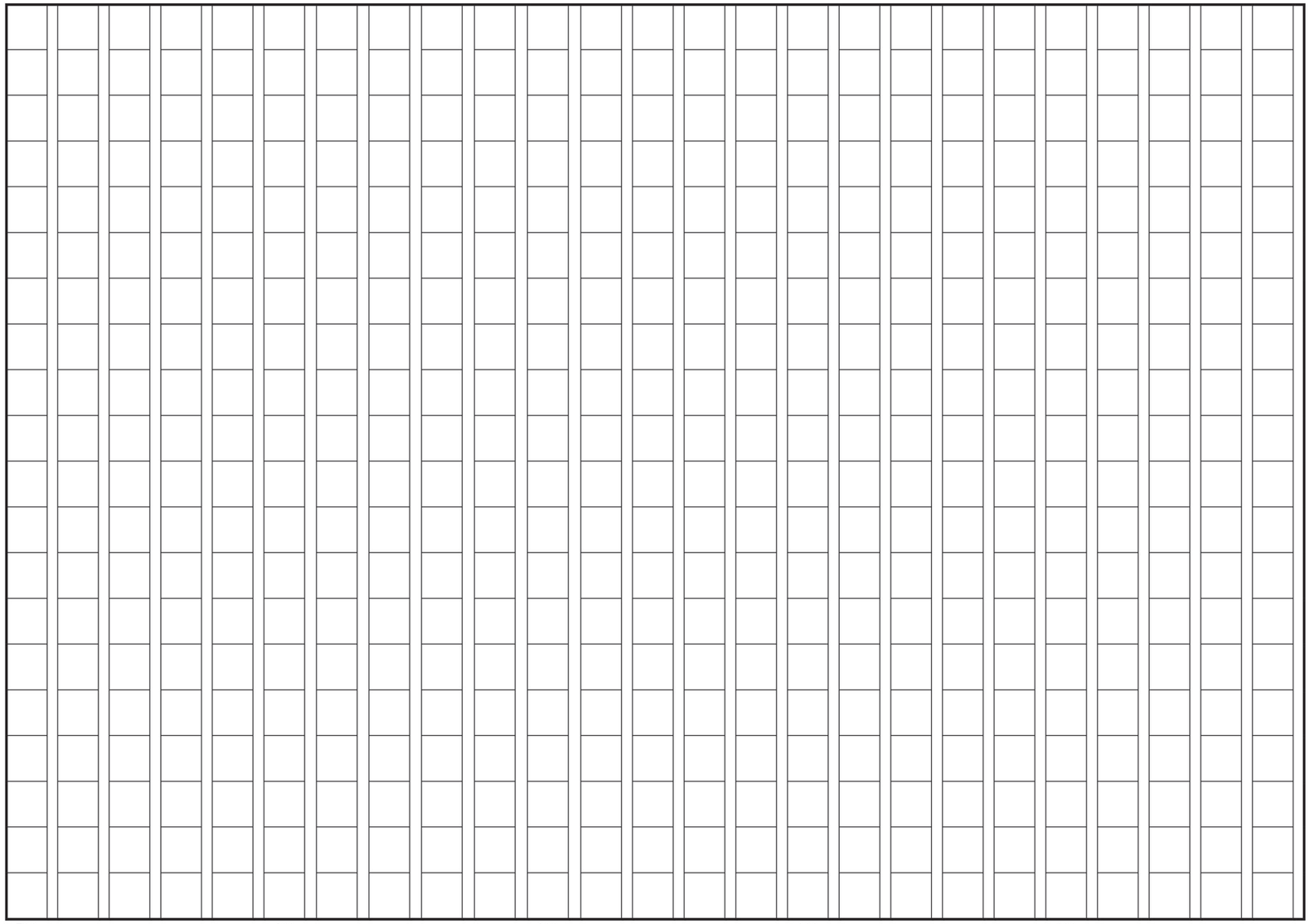
〔問題1〕



〔問題2〕



〔問題3〕



受験番号	座席番号	総　得　点
		／100

2025（令和7）年度　適性Ⅰ型　2月1日　解答例

１日目

問題１（５点×４問）

Ａ　自動運転

Ｂ　合理的

Ｃ　思考の仕組み

Ｄ　命の「選択」

問題２（２０点）

ＡＩは人間と違い、「何となく理解」することや命の尊さを感じることもないため、極端なことをする可能性があるということ。

問題３（60点）

どちらの筆者も「AIに職が奪われる」とは考えておらず、新しい職業が生まれたり、AIは人間を超えるほど賢くはなれないため、パートナーのような存在になったりすると考えている。

それでは、私が考える「今後のAI技術」であるが、人間とAIはそれぞれの得意分野を使って共存する関係になると思う。これからは仕事でのAIの活用はさらに進み、あらゆる職種で業務内容の半数近い仕事内容がAIに置き換わるかもしれない。しかし、コミュニケーション能力や共感力はAIに備わっておらず、必ずどこかで人間の出番があると思う。

例えば薬剤師の仕事を考えてみた。大量のデータを素早く正確に処理し、薬を調剤する仕事は、人間に比べてミスが限りなく少ないAIが担当すると効率的だし、時間的に薬剤師さんたちにもゆとりが出てくる。その分、患者さんたちにていねいに服薬の指示をしたりお薬手帳の記録をたどって患者さんと薬剤師さんがコミュニケーションをとることができる患者さんからすると体調面だけでなくちょっとした世間話も薬剤師さんとしたいだろうし、薬剤師さんもそんな患者さんと寄り添いたいはずだ。

このように、持ち場を分かち合ってAIと人間は共存共栄するであろう。（４９７字）